

近代剣道の技の変遷について—突き技を中心に—

境 英 俊*

Hidetoshi SAKAI
A Change of Waza in Modern Kendo
—With reference to Tsuki—

I はじめに

江戸時代中期に出現した「しない打ち込み稽古」が主流となり、剣術が形稽古からしない打ち込み稽古へと移行し、さらに試合剣術が中心となった近世後期は剣術の競技化・スポーツ化の萌芽期と言える。(1)

さらに、弘化年間（1844～1848）には北辰一刀流では「剣術六十八手」といわれる技の体系化が創案されており、中村は「この『剣術六十八手』が近代剣道の「技」の体系の基礎となっており、近代剣道がスタートした地点といっても過言ではない。」(2)としている。

しかし、明治初期、西洋文明の移入により、近代化の名の元に、剣術は武士階級の消滅等により衰退の一途を辿った。この消滅の危機を救ったのが榊原鍵吉の撃剣興行である。これは剣術をいわゆる見世物として取り上げたものであるが、消滅しかけていた剣術の命脈を保ったという点ではその評価は高いが、その反面、剣術の本質を失わせたという見方もあり功罪両面を持ち合わせている。

さらに、明治10年（1877）の西南戦争における警視庁抜刀隊の活躍が剣術の必要性を再認識させたきっかけであると言われている。この功績が警視庁における武術採用の大きな要因となるのである。(3)

その後、警視庁では警察官の教育のために剣術を取り入れ、その指導者として幕末以来の各流派の大家を採用した。しかし、その指導法というのが各流まちまちで不都合が生じ、それらを統一するために「警視庁流剣術形」が制定された。(4)これは各流派の代表的な技からそれぞれ一本ずつ、十本で構成されており、ただ単に統合した

だけの系統性の無いものであった。全国的に統一されたのは大正元年（1912）に大日本武徳会により制定された「大日本帝国剣道形」である。この形は大太刀七本、小太刀三本の計十本からできており、その後全国に普及・実施され、その解釈に加註・増訂はあったが、そのまま「日本剣道形」として現代に受け継がれている。(5)

この形の制定による各流派の統一、指導・練習の一般化ということが剣道の近代化のための重要な事からなのである。

さらに、近代学校教育制度の確立にともない、剣術を学校教育に採用しようとする気運が高まり、教材としての剣術の指導法等の体系化が急務となったのである。

剣道が学校教育の教材として認められたのは明治44年（1911）のことである。この時点では正科必修ではなく、事実上随意科にすぎなかった。しかし一応学校体育に認められたことは、その後の学校剣道の発展の大きな契機となったことは間違いない。(6)

このような状況の中、種々の剣術関係書が出版されたのである。明治17年（1884）8月には近代剣道書第一号となる根岸信五郎の「撃剣指南」(7)、そして同年11月には高坂昌孝の「千葉周作先生直伝剣術名人法」(8)が刊行された。この「剣術名人法」における「技」の体系化は前出の北辰一刀流「剣術六十八手」が基になっており、その後の剣道関係書はこの「剣術名人法」を基調としている。

大正時代には、近代から現代にかけての剣道書の最高峰に位置すると言われる高野佐三郎著「剣道」（大正4年）(9)が刊行された。この書の特徴は、剣道をその伝統的格闘技としての特色を生かしながら、技法やその学習指導法をより合理化、客観化することにより近代剣道と

*島根大学教育学部保険体育研究室

表1 時代区分と参考文献

I 期	II 期	III 期	IV 期
千葉周作先生直伝剣術名人法 (M 17) 註 8	剣道 (T 4) 註 9	最も実際のな学生剣道の粹 (T 14) 註 11	剣道修練 (S 17) 註 25
撃剣之極意 (M38) 註 14	剣道修業乃栞 (T 6) 註 17	剣道指南 (S 3) 註 18	
剣術落葉集 (T 1) 註 15		一刀正伝無刀流剣道教典 (S 9) 註 19	
剣道の術理 (T 2) 註 16		剣道新教範 (S 10) 註 20	
		剣道解説 (S 11) 註 21	
		改訂帝な剣道教本 (S 12) 註 22	
		剣道の理論と実際 (S 12) 註 23	
		剣道読本 (S 14) 註 24	

* M-明治 T-大正 S-昭和

し再活性化させるべきだと強調していることである。⁽¹⁰⁾
さらに、大正14年(1925)には富永堅吾による「最も実際のな学生剣道の粹」⁽¹¹⁾が刊行され、その後戦前までに多くの剣道書が出版されたが、そのほとんどはこの書の「技」の分類を基にしている。

剣道の技術史を研究するには、その運動の核となる「技」の変遷過程をまず明らかにしなければならない。

筆者は以前、剣道における「突き技」について運動学的に分析を行った。⁽¹²⁾そこで今回は剣道の技の中でも特に武術としての流れをくむと言われる「突き技」⁽¹³⁾を取り上げ、その変遷過程を明らかにするために、高坂昌孝による「千葉周作先生直伝剣術名人法」を基調とし、大正から昭和の戦前までに刊行された文献からそこに表記されている「突き技」の分類や名称の推移について考察を加える。

II 時代区分と参考とする文献

1. 時代区分について

I期-「剣術名人法」を基調とし、大正初期まで。剣術の統一が図られた時代である。大日本帝国剣道形が制定され、学校教育の場に剣道が取り入れられた。

II期-その後の剣道書にとってバイブル的存在の「剣道」が刊行され、また剣道形が普及し始めた。

III期-天覧試合(昭和4.9.15年)が催され、また、学生を中心に対抗試合が盛んに行われるなど競技としての剣道が隆盛した。

IV期-戦時体制下。武道が必修となり、実施要領が制定された。

2. 「剣術名人法」について

「千葉周作先生直伝剣術名人法」は北辰一刀流の祖千葉周作成政の門人であった高坂昌孝により明治17年に刊行された。内容としてはほとんど剣道実地修行が中心である。

- 第一 剣術初心稽古心得
- 第二 一刀流秘事
- 第三 剣術修行心得
- 第四 剣術他流試合心得
- 第五 剣術名人ノ位
- 第六 剣術六十八手
- 第七 剣術名歌

「剣術六十八手」は面業二十手、突業十八手、籠手業十二手、胴業七手、続業十一手に分類されている。突業は面業に次いで多く、また二番目に配列してあることから技の中でも重要視されている。また、続業の二手を含めると二十手の突業が記されている。

(突業十八手)

- 諸手突

この方諸手にて向うを突くを云う。

- 片手突

この方片手にて向うを突くを云う。

- 二段突

双方下段、星眼等にて守り居るを、この方より右籠手を打たんとする色を示せば、向う下段に應じその籠手を防ぐ、その処を向うの左より突くを云う。

- 抜突

右同構えに守り居るを、向うよりこの方の面へ打ち来る処を、この方は左足より右足を斜めに跡

へ引き、向うの太刀下を潜りぬけ喉を突くを云う。

• 切落突

右同構えに守り居るを、向うより打ち来るを切落し、諸手にて突くを云う。

• 表 突

右同構えに守り居るを、向うの太刀下段に下げる処を見すまし、この方左片手にて向うの左の方、即ち表より突くを云う。

• 押 突

右同構えに守り居るを、この方向うの太刀の左より押さえ、諸手にて突くを云う。

• 籠手引懸突

右同構えに守り居るを、向うよりこの方の面へ打ち来る処のその右籠手を太刀にて押さえ突くを云う。時宜により左籠手を押さえ突くことも有るべし。

• 引入突

右同構えに守り居るを、向うより片手突きにてこの方の表あるいは裏へ突き来るを、向うの太刀に添い引き入れ、そのまま諸手にて突くを云う。

• 利生突

右同構えに守り居るを、向う進まんとする頭へ、この方諸手にて太刀を真直ぐに延ばせば、向うより自然と突きかかるを云う。

• 上段利生突

向う下段この方上段にて、向う進まんとする頭へ、この方上段を下ろし、諸手にて太刀を真直ぐに向うへ延ばせば、向うより自然と突きかかるを云う。

• 上段引入突

右同構えに守り居るを、向うより片手にて突き来るを、この方上段よりその太刀に添い入れ突くを云う。

• 籠手色突

双方下段星眼等にて、この方向うの右籠手を打たんとする色を示せば、向う太刀を下段に守り、その籠手を防ぐ、その処を通さず片手にて突くを云う。

• 籠手外突

右同構えに守り居るを、向うよりこの方の右籠手へ打ち来る、その右籠手を離し左片手にて突くを云う。

• 地生突

右同構えに守り居るを、向うよりこの方の面へ打ち来る、その両手の内へこの方太刀を下より引

き掛け、さて早く引きぬき諸手にて突くを云う。

• 巻落突

右同構えに守り居るを、向うよりこの方の面へ打ち来るを、右あるいは左へ巻き落し突くを云う。

• 突掛突

右同構えに守り居るを、向うの下段になる処の透を見て、そのまま諸手にて喉を目がけ突き掛け押し行くを云う。

• 三段突

右同構えに守り居るを、この方向うの右籠手を打たんとする色を示せば、向う下段に直し防ぐ。この方また左籠手を打たんとする色を示せば、向うまたその籠手を防ぐ、その処を諸手にて向うの右、即ち裏より突くを云う。ただしこの業は、至極迅速にあらでは出来難き業なり。

Ⅲ 「突き業」の変遷について

表記されている突き業の数を見ると、「剣術名人法」の18手（続業を入れると20手）が最も多く、Ⅰ期では15～18手、Ⅱ期では13～15手、Ⅲ期では7～12手と徐々に減少している。

Ⅰ期においては、ここに取り上げた4種の文献にほとんど差異は見られないが、「撃剣之極意」14「剣道の術理」16においては諸手突、片手突の表記が見られない。そもそも突き業というのは諸手が片手のどちらでしか技を施さないため省略されたものと考えられる。つまり、様々な表現があれ、結局は諸手突か片手突の二種類に大別されるのである。

「剣術名人法」以降、大正初期にかけては技術的には大きな変化は見られない。ちなみに近代の剣道の統一を図るために考案された「大日本帝国剣道形」の制定が大正元年、また剣道が学校教育の教材として認められたのが明治44年のことである。このことから、この時期は近代において初めて技術的に体系化された「剣術名人法」をほとんどそのまま踏襲していたものと考えられる。

明治時代の文献に見られる「突き業」の中には非常に困難な業が数多く含まれている。これは、この時代の剣術には依然として古流の業の影響が根強く残っていたためと考えられる。

Ⅱ期においては大正4年に刊行された名著「剣道」が中心となるが、技の表記については「剣術名人法」を基本としている。

「剣術名人法」と「剣道」を比較すると、技の総数では68手から50手へと減少しており、突き業については消滅

表2 文献別「突き業」一覧（I期）

剣術名人法 (M17) (突き十八手)	撃剣之極意 (M38) (突きの部十五手)	剣術落葉集 (T1) (刺突法)	剣道の術理 (T2) (刺 突)
18	15	18	15
諸手突		諸手突き	
片手突		片手突き	
二段突	二段突き	二段突き	二段突き
抜 突	抜き突き	抜き突き	抜き突き
切落突	切り落とし突き	切落突き	切落し突き
表 突	表突き	表突き	表突き
押 突	押し突き	押し突き	押し突き
籠手引懸突	小手引き懸け突き	甲手引懸突き	甲手引懸け突き
引入突	引き入れ突き	引入突き	引入れ突き
利生突	利生突き	利生突き	利生突き
上段利生突	上段利生突き	上段利生突き	上段利生突き
上段引入突	上段引入れ突き	上段引入突き	上段引入れ突き
籠手色突	小手色突き	甲手色突き	甲手色突き
籠手外突	小手外し突き	甲手外突き	甲手外突き
地生突	地生え突き	地生突き	
巻落突	巻き落とし突き	巻落突き	巻落し突き
突掛突	突っ掛け突き	突き懸け突き	突懸け突き
三段突		三段突き	
(続業)			
籠手面胴突	小手面胴突き	甲手面胴突き	
籠手突	小手突き	甲手突き	甲手突き

* M-明治 T-大正 S-昭和

* 表中2段目の数字は「突き技」の数

「剣術名人法」「撃剣之極意」「剣術落葉集」には(続業)の数は含まれていない。

した業、あるいは名称が変わった技が見られる。

(消滅した技)

○籠手引懸突 ○上段利生突 ○籠手色突 ○籠手
外突 ○地生突 ○突掛突 ○三段突

これらの技は非常に難しいか、あるいはそれ以外の似通った技に吸収されたものと考えられる。「籠手引懸突」は相手がこちらの面に打ち込んでくるところをその籠手を押さえて突く技である。Ⅲ期の「最も实际的な学生剣道の粹」に見られる「押へ突」は2通りの突き方を示しており、一つは「籠手引懸突」の突き方であり、一つはこちらから相手の刀を押さえて突く技であることからこの技は一つにまとめられたものと考えられる。「上段利生突」は「利生突」に、「籠手色突」は「二段突」にまとめられたものであろう。

新たに見られる「出頭突き」については、それまでは

「利生突き」と表現している。その後の文献を見ると「利生突き」は「迎え突き」と表しているものが多く、「出頭突き」と「迎え突き」を区別して表記しているものもある。現代においては「出頭突き(出端突き)」と「迎え突き」は区別して用いている。前者は相手の起こり頭をこちらから前に出て突く積極的な技であるが、後者は相手が打ち掛かってくるところに、こちらは構えたまま手を伸ばせば、自然と突き掛かってくるものである。現代の「出頭突き」はどちらかというところ「突き掛突き」に近いものと考えられる。

「剣道」と同時代の「剣動修業乃業」(7)については、諸手突きや片手突きといういわゆる基本的な技は省略されているものの、これも「剣術名人法」を基にしているのが同える。しかし、技そのものの内容説明がなく難解な技も見られる。特に「乗の懸かり突き」「直入れ突き」

表3 文献別「突き業」一覧(Ⅱ期)

剣術名人法 (M17) (突き業十八手)	剣 道 (T 4) (突き業十三種)	剣道修業乃栞 (T 6) (突き業十五手)
18	13	15
諸手突	諸手突き	
片手突	片手突き	
二段突	二段突き	
抜 突	抜き突き	抜き突き
切落突	切落し突き	切り落し突き
表 突	表突き	
押 突	裏突き	
籠手引懸突		
引き入突	入り突き (突き返し突き)	引き入れ摺れ突き
利生突	出頭突き	利生突き
上段利生突		上段利生突き
上段引き入突	上段変化突き	上段引き入れ突き
籠手色突		甲手色突き
籠手外突		
地生突		地生突き
巻落突	巻き落し突き	巻き落し突き
突掛突		突き懸け突き
三段突		
	籠手押し前突き	押し甲手突き
		乗の懸かり突き
		直入れ突き
		揚げ突き
(続業)		
籠手面胴突		甲手面胴突き
籠手突		

「揚げ突き」はそれ以前も以降もどの文献にも見られない。

この時期はⅠ期の流れを汲み、社会においても学校においても剣道を普及発展させようとする動きが定着してきた時期である。そのためにはそれまでの難解な表現の技をできるだけ整理し、指導者も学習者も理解しやすい表現に変える必要があったものと考えられる。また、この時期にそれまで「剣術」と言っていたのが「剣道」と言う表現に定着したのである。

Ⅲ期においては「最も実的な学生剣道の粹」の著者

である富永堅吾をはじめとして、東京高等師範学校出身者による剣道書が数多く出版された。その中でも「学生剣道の粹」はその緒言に見られるように「剣道の奥義を説くのではなく、特に斯道の新研究を発表するのではなく、剣道修行の実際に関する最も必要適切な事項を、写真図解を加えていたって平易に述べ」²⁶⁾たものである。まさに学生にとって実際に役立つテキストであり、それまでの剣道書に見られた技術を再構成し新たに体系付けた書である。言い換えれば現代剣道への橋渡的存在の名著と言える。これ以降の文献はほとんどこの書の技の

表4-1 文献別「突き業」一覧(Ⅲ期)

剣術名人法(M17) (突業十八手)	最も実際のな(T14) 学生剣道の粋(突業)	剣道指南(S3) (突業)	一刀正伝無刀流(S9) 剣道教典(突き抜十業)	剣道新教範(S10) (突業)
18	12	12	10	8
諸手突	諸手突(前,表,裏)	諸手突(前,表,裏)	諸手突き(表,裏)	諸手突(表,裏)
片手突	片手突(表,裏)	片手突(表,裏)		
二段突			二段突き	
抜突			抜き突き	抜き突
切落突			切り落とし突き	切落し突
表突				
押突	押へ突	押へ突		
籠手引懸突				
引入突	入れ突	入れ突	引き入れ突き	返し突
利生突	迎え突(利生突)	迎え突	利生突き	
上段利生突				
上段引込突				
籠手色突				左片手突
籠手外突	籠手外し突	籠手外し突		籠手外し突
地生突				
巻落突	巻落し突	巻き落し突き	巻き落とし突き	
突懸突			突っ掛り突き	
三段突			三段突き	
	攻込み突	攻込み突		
	払い突	払ひ突		
			出頭突き	
(続業)				
籠手面胴突				
籠手突				籠手から突

分類を基に構成している。

特徴的な点として、①諸手突き、片手突きの表記法の違い ②消滅した技 ③新たに取り上げられた技の三点について考察を進める。

①諸手突き、片手突き

それまでは諸手突き、片手突きのみの表現であったのが前者については前突き、表突き、裏突きの三種、後者については表突き、裏突きの二種の表記になっている。前突きは突き技の基本中の基本であり、これらの技は現代においては「基本動作」として取り扱っている。

②消滅した技

○二段突 ○抜突 ○切落突 ○表突

二段突、表突は技を出す前の攻めと崩しにより分類されていたもので、ここでは諸手突き、片手突きにまとめられたものと考えられる。

抜突、切落突は技術的に見ても非常に難しい技で、特に学生剣道を中心に試合が盛んに行われるようになり、剣道の技術もスピード感溢れるものになってきたため対応出来にくくなったものと考えられる。

③新たに取り上げられた技

○攻込み突 ○払い突

攻込み突は突き方としては諸手突きと同様であるがより攻めを強調したものである。これは昭和3年刊の「剣道指南(小澤愛次郎著)」(18)には見られるがそれ以降の文献には見当たらない。おそらく諸手

表 4-2 文献別「突き業」一覧 (Ⅲ期)

剣術名人法(M17) (実業十八手)	剣道解説(S17) (突き技)	改訂帝国剣道教本 (S12) (突き技)	剣道の理論と実際(S12) (突き業九手法)	剣道読本(S14) (突き業)
18	10	7	9	7
諸手突	前・表・裏突	前・表・裏突	表・裏・前突き	諸手突(表・裏)
片手突	片手突		片手突き	左片手突
二段突				籠手を攻めて突き
抜 突				
切落突				
表 突				
押 突				
籠手引懸突				
引込突	入れ突	入れ突	入れ突き	突き返し突き
利生突	迎え突	出頭突	迎え突き(出頭突き)	
上段利生突				
上段引入突				
籠手色突				
籠手外突	(片手突)		(片手突き)	
地生突				
巻落突	巻き落とし突	巻落とし突		
突掛突				
三段突				
	払前突	払前突	払い突き	払い突き
	出頭突		追い込み突き	
			籠手二段突き	
(続業)				
籠手面胴突				
籠手突				

突きとしての取扱いになったものと思われる。

払い突きは二通りの突き方があり、こちらから進んで相手の刀を払い、踏み込んで突く場合と、相手が籠手か胴を撃ち、或いは突いてきたのを払って突く場合とがある。これは「押へ突」と基本的に似ており払うのと押さえるのとの違いのみである。後者の突き方は「剣術名人法」に見られる「籠手引懸突」や「切落突」と同様に非常に難しい技でありこれ以降は消滅してしまう技である。前者の突き方は、昭和11年刊の「剣道解説(剣道教育研究会)」^①や同12年刊「改訂帝国剣道教本(小川金之助著)」^②では「払前突」として取り上げられており、さらに同年刊行の「剣道の理論と実際(縄田忠雄著)」^③以降では単に「払い突き」として表している。この「払

い突き」は現代でも対人的技能のなかのしかけていく技として実施している技である。

また、表記法が変わった技として「迎え突」がある。これは前にも述べたが「利生突」のことであり、「帝国剣道教本」や「剣道の理論と実際」においても「迎え突」「出頭突」の両方の表現があり、明確には区分されていないものである。

明治後半以来、次第に学生の間に広まって来た剣道は大正末期から昭和初期にかけて非常な活況を呈した。昭和3年(1928)には全日本学生剣道連盟が結成され第一回全日本大学高専剣道優勝大会が開催された。またこの時期は学生剣道とは別に、歴史に残る大きな大会が催された。昭和4年の御大礼記念天覧武道大会、昭和9年の皇太子殿下御誕生奉祝天覧武道大会、そして昭和15年の

表5 文献別「技」の分類

	剣道修錬 (S17)		剣道指導の手引 (S56)
基本動作	前突き 表突き 裏突き	基本動作	諸手突き (表突き, 裏突き) 片手突き
応用動作	二段斬突 拂い技 <u>拂ひ前突き</u> 抜き技 摺り上げ技 出頭技 <u>出頭突き</u> 切り落とし技 應じ返し技 <u>入れ突き</u>	对人的技能	(1) しかけていく技 二・三段の技 払い技 <u>払い突き</u> 出ばな技 引き技 (2) 応じていく技 抜き技 すり上げ技 打ち落とし技 返し技

紀元二千六百年奉祝天覧試合がそれである。外来スポーツの影響を受け剣道もより競技化が進んできた時期である。つまり、剣道の特性である打つ、突く、かわすという運動技術についてより合理性を求めたところにこのような技術の変化が見られたものと考えられる。

IV 「技」の分類法の変化

昭和17年刊の「剣道修錬 (三橋秀三著)」⁽²⁵⁾を見をとそれまでの文献とは明らかに分類法が違うのが分かる。この書は当時東京高等師範学校教授であった三橋秀三が著した書である。Ⅲ期までに見られた文献との大きな違いは、剣道の技術を「基本動作」と「応用動作」に分け、さらに「応用動作」を○二段斬突 ○拂ひ技 ○抜き技 ○摺り上げ技 ○出頭技 ○切り落とし技 ○応じ返し技に分類している点である。それまでは打突部位ごとに分けられており、この時期において「技」の分類法に大きな変化が見られたのである。

しかしこれ以前、昭和11年の第二次改正学校体操教授要目によりはじめて剣道の内容が明らかにされ、基本動作、応用動作、形、及び講話と明記された。⁽²⁷⁾

昭和56年刊の「剣道指導の手引 (文部省)」⁽²⁸⁾の分類法と対比して見ると「応用動作」が「对人的技能」に変わりさらに「しかけていく技」と「応じていく技」に分けられてはいるものの基本的なスタイルはほぼ同じである。これによるとこの時期には剣道の学習内容はほぼ整理され、「現代剣道」の「技」の体系化が出来ていたも

のと思われる。

V ま と め

以上、明治17年刊「千葉周作先生直伝剣術名人法」を基調として近代剣道の「技」の変遷を「突き技」を中心に見てきた。

「剣術六十八手」の中の突業十八手を手掛かりとしてその後大正、昭和前期までに出版された剣道書の突き技の分類や名称の変遷を見ると、技の数は徐々に減少しており、消滅した技については現代の剣道では考えられない程非常に難しい内容である。これらは古流の形稽古の名残が残っていた技と言えよう。

「突き技」に限らず68種類もあった各種「技」が半減した原因として太田は「技術の変化は、技術の規定要素(限定要素)が変化した場合と、その合理性を追求したことにより変化する場合がある。」⁽²⁹⁾と述べている。また、「技術の変遷過程で大きな役割を果たすと考えられるのは、技術実践者のより高い合理性を目指しての試行錯誤と努力であり、剣道実践者がより合理性の高い運動へと努力を継続することにより、技術に一つの傾向が現れたり、また合理性の低い技は自然淘汰されて消滅してしまう。」⁽³⁰⁾とまとめている。

つまり、形稽古から竹刀打ち込み稽古へ移行し、さらには剣道を統一するために「大日本帝国剣道形」を制定し、また学校教育に剣道を採用するために教習過程を整理する段階において指導しやすい技あるいは学習しやす

い技が残ってきたのである。

現代剣道と古流の剣術の最も違う点は足の運びと踏み方であると言われている。^⑧それは、現代剣道は相手をより速く強く打突するため送り足と踏み込み足主体の足捌きなのに対して、古流剣術は歩み足とすり足であることから理解できる。また「大日本帝国剣道形」を見てもすべて歩み足とすり足で行っている。

このことから、よりスピード感溢れる剣道に変わってきたことにより「技」が消滅したり洗練されながら現代剣道の「技」の分類に落ち着いたものと言える。

今回は「技」の分類と名称の変遷を見ることしか出来なかった。今後さらに多くの文献を収集し、「技」の運動学的な分析を通してより深く考察しなければならない。

註

- (1) 拙著「剣道の競技化・スポーツ化」(中山正吉他編『人間の運動と健康』不昧堂出版)32頁,1990年。
- (2) 中村民雄「武道の技術史研究序説」(『武道学研究第24巻第1号』日本武道学会)5頁,1990年。中村は「技」の体系化と技術化が剣術の「競技化」により一層拍車をかけることになり、スポーツ技術史的にみるとこの期は、いわば「遊戯」から「競技」への過渡期といってよからうし、近代剣道がスタートした地点といっても過言ではないと述べている。
- (3) 中林信二『武道のすすめ』中林信二先生遺作集刊行会,100頁,1987年。
- (4) 註(3)101頁。
- (5) 註(3)108頁。
- (6) 註(3)116頁。
- (7) 根岸信五郎『撃剣指南』(今村嘉雄他編『近代剣道名著大系』第一巻),同朋舎出版,53-71頁,1986年。
- (8) 高坂昌孝『千葉周作先生直伝剣術名人法』(註7,第二巻),36-38頁。
- (9) 高野佐三郎『剣道』,島津書房,142-143頁,1982年復刻新版。
- (10) 今村嘉雄『近代剣道名著大系』第三巻,同朋舎出版,419頁,1986年。今村は「解題」の中で「本書は近代から現代にかけての剣道書の最高峰に位置しているといっても過言ではあるまい。…中略…本書によって近代(現代)剣道はスタートしたといっても過言ではあるまい。」と高い評価をしている。
- (11) 富永堅吾『最も実際的な学生剣道の粹』(註7,第七巻),395-401頁。
- (12) 拙稿『剣道における「突き」動作の分析』(島根大学教育学部紀要第21巻),31-37頁,1987年。
- (13) 玉濱公士『剣道の突き技に関する一研究』(島根大学教育専攻科修了論文),157頁,1990年。
- (14) 原耕作『撃剣之極意完』(註7,第一巻),339-340頁。
- (15) 上田頼三『剣術落葉集』(註7,第五巻),81-83頁。
- (16) 児玉市蔵『剣道の術理』(註7,第四巻),229-231頁。
- (17) 牧野秀『剣道修業乃菜』(註7,第三巻),409-410頁。
- (18) 小澤愛次郎『剣道指南』,体育とスポーツ出版社,118-131頁,1978年復刻版。
- (19) 峯房一『一刀正伝無刀流剣道経典』(註7,第十二巻),39-40頁。
- (20) 有田二郎『剣道新教範』,膳谷宗文館,123-129頁,1935年。
- (21) 剣道教育研究会編『剣道解説』(註7,第十二巻)305-312頁。
- (22) 小川金之助『改訂帝国剣道教本』(註7,第九巻)308-309頁。
- (23) 縄田忠雄『剣道の理論と実際』(註7,第十一巻)99-101頁。
- (24) 野間恒『剣道読本』(註7,第十二巻),173頁。
- (25) 三橋秀三『剣道修録』,西東社,29-91頁,1942年。
- (26) 註11,324頁。
- (27) 今村嘉雄『日本体育史』,不昧堂出版,573-576頁,1970年。昭和十一年の二次改正要目ではじめて剣道及柔道の内容が明らかにされた。剣道は基本動作(一年十一,二,三年二)応用動作(一年六,二,三年二十五,四,五年十二)形(二,三年太刀ノ形,四,五年小太刀ノ形)講話(剣道ノ意義及目的,修行ノ心得,道場心得,稽古及試合ノ心得,剣道ニヨリテ養ハルル諸徳,剣道術理,刀剣ニ関スル概念,剣道発達ノ概要)等。
- (28) 文部省『学校体育実技指導資料第1集 剣道指導の手引』,ぎょうせい,6-11頁,1981年。
- (29) 太田順康『近代剣道の技術の変遷に関する一考察』(『武道学研究第17巻第1号』日本武道学会)23頁,1985年。
- (30) 註29,24頁。
- (31) 註13,134頁。